

かかっていると思います。

(4) 今後の品種改良

昨今の消費者の食に対する最大の関心事項はやはり「安全・安心」だと思います。サツマイモは比較的化学肥料や農薬の使用量が少ない作物ではありますが、多くの産地では、薬剤による土壌消毒が行われています。

これは、主にサツマイモネコブセンチュウと立枯病の被害回避のために行われており、適正に使用されていれば、危険なものではありませんが、より「安心」を求める消費者の要望に応えるためには、あまり土壌消毒を必要としない品種の育成が重要と考えています。

現在の主要品種である高系14号はネコブセンチュウと立枯病の両方に抵抗性を持っていませんし、ベニアズマは立枯病抵抗性ですが、ネコブセンチュウには感受性のため、やはり土壌消毒が必要です。従って、特にこの2つの病害虫に対する抵抗性を複合的に持っている品種の育成が急務であると考えています。

サツマイモは、同質6倍体で遺伝的に雑ばくであるため、食味などの形質と病害虫抵抗性を併せ持つ品種の育成は容易ではありませんが、マーカー選抜等の最新の手法は確立されつつあり、ごく近い将来、良食味の複合病害虫抵抗性品種を育成出来るものと考えています。

また、かなり将来の話になってしまいますが、最近、サツマイモは大気中の窒素を共生細菌を通じて利用していることが解ってきました。この特性の解明が進めば、化学肥料として窒素をほとんど与えなくても栽培出来る品種も不可能ではなくなるかも知れません。

焼き芋用に限ったことではありませんが、これからは、一口サイズの小さいイモが売れると考えています。核家族化などの影響で、例えば3Lサイズのイモを買ってしまうと、食べきれない家庭が多いのではないのでしょうか。焼き芋でも、Lサイズ以上のものは、とても一人では食べ切れません。

先日、韓国のサツマイモ研究者の方が、私たちの試験場に見学にみえま

したが、私たちが、50gサイズのを「クズイモ」として処分しているのを見て、「韓国では、このサイズが一番高いのに！」と驚いていました。韓国と同じ状況になるとは限りませんが、やはり現在の品種よりは小ぶりのイモが良く揃って着く品種が今後のトレンドになるのではないかと考えています。

最後に、あまりうれしい話ではありませんが、現在の不穏な世界情勢を見ると、やはりサツマイモの食料安全保障機能には着目せざるを得ません。サツマイモがいつも家族の、特に子供達の笑顔とともにある食べ物であって欲しいと願いますが、サツマイモの育種を担当するものとしては、不測の事態にも備えて、不良環境耐性などの付与を通じて、サツマイモのこの機能の向上を図り、国民の「安心」に応えることも重要な仕事だと考えています。



少なくなったサツマイモ畑

太平洋戦争が終わったのは昭和20年(1945)。その年のわが国のサツマイモ畑の総面積は初めて40万ヘクタールの大台に乗った。いも畑はその後も増え続け、昭和24年には史上最大の44万800ヘクタールに達した。

その後、それは減り続け、今年、平成17年(2005)は4万ヘクタールを割っていると思われる。農林水産省の最新情報は平成14年産についてのもので、それがすでに3万9700ヘクタールになっているからである。

今年は戦後60年。戦争によって増えたいも畑は、この60年で最盛期の10分の1以下になった。

